



己に克^{かへ}る

劉念台

問ふ、克とは、勝なりと。是れ仁を以て不仁に勝つことなるや否や。曰く、先に箇の仁有りて去きて不仁に勝つには非ず、只だ不仁の処に勝つが便ち是れ仁なり。曰く、畢竟主人翁有りて盜賊に勝つ可きか。曰く、此れ頭上に頭を安^{やす}うるの見なり。仁の体は湛然、一物を容れず。纔かに物有れば、善悪是非を論ぜず、都な是れ不仁なり。仁と為るとは正に此の処に就きて銷鎔し、他の箇の湛然の本体に還る。此れ己に克（かへ）ること正に時に当るなり。若し先に箇の主人に拠りて在らば、便ち是れ物欲の為す所にして、賊を認めて主と作すなり。若し主人常に在らば、則ち亦た盜賊の逐ふ可き無し。能く盜賊を逐へば、便ち是れ主人、別に主人を尋ぬるを必せず。

（『劉子全書』卷三十、論語学案より）